

「恋人の聖地」「ふるさとウェディングコンクール」 ブライダル切り口に地方創生に取り組む ブライダルファッションデザイナー 桂 由美さん

2016年新春特別インタビュー

(1面から続く)

魅力とは 現代が失ったものが あるということ

—美しい佇まいを常に意識している旅館の女将たちに美意識の持ち方をアドバイスしてください。

「言葉遣い、話し方、物腰が重要です。まず旅館について最初に会う女将さんが館の象徴だと思います。最近現代的な女将さんもいらっしゃいますが、そうじゃない方がいい」

—先代の社長が「女将さんは歩く伝統文化だ」と言っていました。着物、言葉遣い、佇まい、もてなし方などすべての伝統文化を持っています。



日本で初めて「ブライダル」という言葉を使った桂さん。昨年は活動50周年を迎えた。2月16日には東京・有楽町の東京国際フォーラムで元宝塚トップスター真琴つばささんら宝塚OGがゲスト出演するグランドコレクション「薔薇の饗宴2016」が開催される

—変えない方がいいと思う

「私も残していきたいと思っています。時代が変わってきて、若い女将さんたちに啓蒙していくのも自社の仕事だと思っています。」

「日本の伝統文化に詳しい外国人が、書いたり、言ったりしてくれる方が感じることもある。魅力とは現代が失ったものがあるということですね。京都は環境、自然、人が昔の良さを失っていない。新しいものだけ追いかけても、独自性、日本の良さがなくなってしまう」

—東日本大震災の被災地を訪れ

た訪日客が意外なところが印象に残ったという統計がありました。農家のおばあちゃんが作ったさうりだとか、手作業で作った籠とかにすごく魅力を感じるらしいです。そういうものは残していきたいですね。

「分かります。ブライダルも和がブームになってきている。ホテルや式場の神前式ではなくて、明治神宮や日枝神社など神社で挙げる方が増えてきています」

パワーの源は責任感 「妹の結婚式だ」と 思っただけでやるなわくら」

—思い出に残る旅はありますか。

「私は本当に仕事人間で、この50年の間に何百回と海外に出ています。が、すべて仕事です。ただ、1回だけ主人と新婚旅行みたいなことをやろうよとトルコに行きました。30年くらい前ですが、すごくおもしろかったですね。カッパドキアとかね。今はトルコは新婚旅行先として人気ですが、30年前はまだあまり日本人はいませんでした。国内はプライベートでもできるだけ恋人の聖地に行くようにしています。まだ3分

ともこの仕事に向いていたと思うし、お客さまの喜びが自分の喜びになります。スタッフにも『お金儲けだけだったら他の仕事をした方がいい』と言っています。我々はお客さまのお手伝いをするのが仕事ですが、お客さまにとっては一生に1度の晴れのフェスティバルですから失敗が許されません。ブライダルの仕事は『この次は』ということが言えません。普通の仕事の2倍くらい気を使います。例えば生花のブーケは当日まで見られませんが、花屋さんが会場に直接納品しますから。時間通り届かなかったら大変なことになる。担当者は当日休みでも、会場にちゃんと届いているか電話します。スタッフには『自分の妹の結婚式だと思っただけでやるなわくら』と言っています。好きで好きで仕方がない仕事でお客様に感謝されて、ブーケの確認も褒められたら、やっぱり電話しておいでよかっただけでいいよ」

—旅館のおもてなしと同じですね。「また来るよ」という言葉でがんばれる。

「だから疲れたと思ったことはありませんね。病気もケガもありません。健康法を良く聞かれますが『責任感』と答えています。自分で会社を経営して、何十人もスタッフがいますから。病気になるってられないです。1週間も休めと言われたら、逆にガックリと疲れてしまうでしょう(笑い)」

「365日休みなく働いていらっしゃいますが、パワーの源はなんですか。」

「好きなことは長続きます。も

きで好きで仕方がない仕事でお客様に感謝されて、ブーケの確認も褒められたら、やっぱり電話しておいでよかっただけでいいよ」

—旅館のおもてなしと同じですね。「また来るよ」という言葉でがんばれる。

「だから疲れたと思ったことはありませんね。病気もケガもありません。健康法を良く聞かれますが『責任感』と答えています。自分で会社を経営して、何十人もスタッフがいますから。病気になるってられないです。1週間も休めと言われたら、逆にガックリと疲れてしまうでしょう(笑い)」



昨年は琳派400周年を記念して、尾形光琳らの作品にインスパイアされた京友禅のドレスを発表した。「アイデアはどこから」と聞く積田に対し、「いつでもアンテナを張り巡らせている」と答える桂さん